

## 志向性をグラウンドするものとしての『論理学研究』

葛谷 潤\*  
(東京大学)

### 導入

フッサール研究者が、現代分析形而上学におけるグラウンディング概念とフッサール現象学との関係について考察する機会に恵まれたとしよう。この時、おそらくまず検討されるのは、「グラウンディング概念と関連が深いと思われるフッサールの概念を取り出し、それをグラウンディング概念と比較・検討する」という方針ではないだろうか。実際、筆者がとりわけ専門的に扱っているフッサール初期の主著『論理学研究』に限ってみても、現代形而上学におけるグラウンディングと関連の深い関係が(少なくとも)二つある。一つは、命題間の関係としての根拠づけ (*Begründung*) であり、もう一つは、部分全体論における基づけ (*Fundierung*) である<sup>1</sup>。これらとグラウンディングを比較・検討することは、各概念の多角的理解を進展させる効果があると期待される。

---

\* 本研究は JSPS 科研費 JP24K22417 の助成を受けたものである。また、本稿は 2025 年 3 月 15 日に甲南大学で行われた第 23 回フッサール研究会でのシンポジウム「基礎づけ(グラウンディング)の現象学と分析哲学」での講演原稿に基づくものである。

1. 根拠づけ概念の内実、自然演繹の導入則に照らして考えることでよく理解できることがすでに指摘されている (Centrone 2010: §2.3; 植村 2017: pp. 83–84 参照) が、これはまさにグラウンディング関係の典型例の一つである (Fine 2012: §1.7)。対して基づけ関係は、少なくとも『論理学研究』の時点では、通常(強弱関わらず)グラウンディング関係にはカウントされないものを含む。例えばフッサールによれば、ある物体においてその延長とその色は相互に基づけ関係にある。しかし通常、ある物体におけるその延長とその色が互いにグラウンディング関係にあるとはみなされない。基づけ関係については日本語も含め膨大な研究があるが、グラウンディングとの関係で興味深いものとしては後の注でも触れる Correia 2004 がある。

しかし、本稿が以下で展開する考察は、これとはその方針において全く異なる。本稿が採用する見解によれば、『論理学研究』とグラウンディングの関係は、単に『論理学研究』には、グラウンディングに相当ないし類似する概念が登場する」というよりもずっと根本的である。というのも、その見解によれば、『論理学研究』の現象学は、まさに作用の志向性をグラウンドしているものについての探究に他ならないからである。したがって、グラウンディングの概念は、『論理学研究』の現象学について語る上での基本概念になりうる、ということになる。

ただし、以下で展開されるのは、このような見解の解釈上の妥当性を示す議論ではない<sup>2</sup>。以下で展開されるのは、グラウンディング概念を用いた整理がもたらす利点の例示である。より具体的には、グラウンディング概念を用いることで、『論理学研究』における意味概念の意義が明確になるということ、そしてマイケル・ダメットやガレス・エヴァンズ、クリストファー・ピーコックといった論者とフッサールの間の比較が容易になるということ、この二点を確認する。これらは、グラウンディング概念が『論理学研究』を現在「メタ意味論 (metasemantics)」と呼ばれる分野と接続してくれることの帰結である。

本稿の構成は以下のようなものである。まず第一節では、準備作業として、意味論・メタ意味論・グラウンディングの間関係を簡単に確認する。続いて第二節では、『論理学研究』の意味概念の特徴づけが、ゴットロープ・フレーゲの意義概念に対するそれと比べてどう優れているかを、グラウンディングの観点から確認する。最後の第三節では、『論理学研究』の志向性分析に対する方法論を、グラウンディングの観点から現代の諸見解と比較する。

## 1 意味論・メタ意味論・グラウンディング

私たちは日常的に、自分が得た情報を他者に伝えるために、何らかの言語の文を発話する。例えば、私はソクラテスについて、彼が古代ギリシアの哲学者であるということを知っている。私がこのことを英語話者の子供に対して伝えたい場合、私は「Socrates was an ancient Greek philosopher」という文を発話すればよい。私はこの文を

---

2. これに相当する議論はすでに（「グラウンディング」という用語を直接用いてはいないが）葛谷 2025 の第 3 章、第 4 章において展開されている。また本稿の第 2 節は、グラウンディング概念を用いることで葛谷 2025 の第 3 章と第 5 章の議論の一部をより簡潔に語りなおす試みであるともいえる。

発話することで、その子供に、ソクラテスについて、それが古代ギリシアの哲学者であるということ伝えることができる。

さて、この文の発話がほかでもないソクラテスについてのものであるのはなぜだろうか。それはもちろん、発話の際に「Socrates」という語を用いたからである。この至極当たり前の事実は、しかし次のことを意味している。「Socrates」という語は、それが出現する文の発話をほかでもないソクラテスについてのもとするような働きをもつ、ということである。名前のこの働きは前理論的には「指す」、「指示する」、「表す」、「意味する」のような語で言い表される。例えば、「Socrates was an ancient Greek philosopher」を発話することがほかでもないソクラテスについてのものであるのは、「Socrates」がソクラテスを表す名前だからだ、と言われる。

そして同様のことは、名前以外の文法的カテゴリーについても言われうる。例えば誰かが幸福な状態にある（もしくはない）ということ述べるためには、幸福という状態を表す述語、例えば「[be] happy」を（その人を指示する語と適切に組み合わせ）使えばよい。このような具合に、ある言語の各語に対して、それが出現する文の発話が言う事柄の決定に対する寄与（とその文法に沿った合成法）を記述する理論は、その言語の意味論（semantics）と呼ばれる。そして、各語の寄与を表すために用いられる存在者（例えば「Socrates」であればソクラテスその人）は、その語の意味論的値（semantic value）と呼ばれる<sup>3</sup>。もちろん、このような意味論を何らかの自然言語全体に対して数学的に精緻な仕方で構築するためには、言語を定義する構文論とそれに即した寄与の合成に関する透徹した洞察が必要である。そのような洞察のもとで現代意味論の礎を築いた誉は、現在フレーゲに帰される<sup>4</sup>。

さて、仮にある言語の完全な意味論が与えられたとしよう。すると、その言語の各文について、それを主張することが何を言うことになるかが導き出せる。例えば、正しい英語の意味論は、「Donald Trump is crazy」という文を主張することが何を言うこ

---

3. もちろん、ある表現タイプの意味論的値がどんな種類のものであるかということは、理論的な係争点でありうる。名前は確定記述の略記に過ぎないと考えるタイプの記述説をとる場合、その意味論的値は特定の個体ではないもの（例えば、述語の意味論的値から真理値への関数）だということになるだろう。

4. 実際、理論的な概念としての意味論的値の概念を所有していると言えるためには、そのような洞察を所有していることが必要である。ダメットはまさにこのような洞察をフッサールが欠いていると考え、それゆえにフレーゲに比して理論的に明確に劣っていると考えた。葛谷 2025 の第 1 章参照。フッサールの対象概念が意味論的値の概念と類比的な原理で運用されていると言おうとする議論については、富山 2008 や富山 2023 の第 2 章を参照。そのような議論からいえることには厳しい限界があるということについては、葛谷 2025 の第 2 章参照。

とになるのかを、「Donald Trump」の意味論的値がだれで、「[be] crazy」の意味論的値がどのような状態であるか、等々から導き出してくれる。しかし、この意味論がどれほど完全でも全く答えないし、また答えることがその仕事ではない間いがある。それは、「その言語の(原始)表現について、それがその意味論的値をもつということは、なぜ・いかにして成り立っているのか」という問いである。

ここでの「なぜ」は、ある出来事に時間的に先行しそれを因果的に決定・説明する別の出来事を問う「なぜ」ではなく、むしろ当の事柄と同時的に成立し、当の事柄の基底としてそれを構成的に決定・説明する事実を問う「なぜ」であることが意図されている<sup>5</sup>。また、ここでの問いはしばしば「何のおかげで (in virtue of) 成り立っているのか」とか「何に存する (consist in) のか」とも言い換えられる。この種の決定・説明関係が、現在「グラウンディング関係」と言われるもの(の少なくとも典型例)である<sup>6</sup>。

この点を踏まえて先ほど述べたことをもう一度述べなおせば、次のようになる。正しい英語の意味論(と現在想定されているもの)は、「Donald Trump」という語が、それが出現する文の発話をほかでもないトランプその人についてのものとする働きをもつということを教えてくれる。しかし、英語の意味論は、その語がこの働きをもつという事実が何にグラウンドされているのかに関しては何も述べない。というのも、意味論は各語がどんな働きもつかを記述する理論だからである。

ここで問題となっている区別を次のアナロジーが見やすくしてくれるかもしれない。砂糖や塩は、水に入れると溶けるという傾向性/傾向的性質(disposition/dispositional property)、つまり水溶性をもつ。多くの小学生はみなこのこ

5. 分かりやすさのためにここで採用しているこの対比は Burgess and Sherman 2014 によるものである。ただ実際には、このような区別は過度に単純化された二分法に基づいているかもしれない。同論文でも指摘されるように、この対比は、固有名に関するクリプキ的な説明をメタ意味論(後述)から排除してしまう(Burgess and Sherman 2014: p. 4 参照)。私の理解では、ここではある種の階層性が重要であり、因果的かどうかは重要ではない。つまり、意味論的事実を構成する基底的事実は因果的なプロセスでありうるし、そのプロセス(の少なくとも一部)は問題の事実の成立に時間的に先立っていても良い。付け加えるなら、問題の構成的関係それ自身についても、何らか広い意味で(かつ十分理解可能な意味で)「因果的」と呼ばれる可能性や、それが自然科学の探究対象である可能性を排除する意図は私には全くない。

6. 本発表ではグラウンディング関係の関係項のカテゴリーについて事実限定しない表現も用いる(例えば「この錠剤の働きがその基底的なメカニズムによってグラウンドされる」)が、これは関係項のカノニカルな記述についての何らかのコミットメントを表明するものではない。もしかしたら、それらはすべて事実間の関係として規格化するべきかもしれない。

とを日常的な観察から知っているだろう（そして少なくとも、高学年の理科の時間に学ぶ）。しかし、このことを知ることと、（上の意味で）「なぜ・いかにして砂糖や塩は水に溶けるのか」を知ることとは別のことである。このことの説明は、砂糖と塩がマイクロレベルでそれぞれこの種の構造をもつという定言的性質（categorical property）に言及する。さらに言えば、そのような説明は、砂糖と塩はそれぞれ異なる仕方で水溶性をもつということも明らかにしてくれる。というのも、砂糖は極性分子であるがゆえに水溶性をもつのにに対して、塩はイオン結晶であるがゆえに水溶性をもつからである。このような基底的事実に訴えた説明は中学・高校の化学の時間に学ぶ（が、知らなかったり忘れていたりする人も多いはずである）。この例からも明らかのように、砂糖や塩に成り立つ傾向的事実は、それを成り立たせる定言的事実を知ることなしに記述可能である。これと同様のことが、語の働きについても言える。意味論が果たすべき仕事とは、各語の働きが何か（これを「意味論的事実」と呼ぼう）を記述することであって、それをグラウンドする事実を記述することではない。

さて、だとすると、私たちが言語的志向性の成立をただ受け入れるのに満足せず、それがいかに成立しているのかの説明を欲するのであれば、私たちは意味論的事実をグラウンドするものの探究に取り掛かる必要がある。そのような探究は、現実の個々の言語的志向性がどんな基盤によって成立しているかだけでなく、およそ可能的な言語的志向性の諸タイプについて、その事例がどのような基盤によって成立しうるのかも問題にする。スタルネイカーはこのような探究を基礎意味論（foundational semantics）と呼んだ<sup>7</sup>。これは現在ではカプランの用語法に倣ってメタ意味論（metasemantics）と呼ばれることの方が多いので、ここでは「メタ意味論」という名称を採用する<sup>8</sup>。

7. Stalnaker 1997 参照。

8. Kaplan 1989 参照。Burgess and Sherman 2014 の分類では、この種の探求はメタ意味論の中でもとりわけ基本メタ意味論（basic metasemantics）と呼ばれるものに当たる。ちなみに Burgess and Sherman 2014 は、言語哲学の主題と思われていたものが経験科学としての言語学および心理学にどんどん吸収されていく現状を「苦境（predicament）」や「アイデンティティーの危機（identity crisis）」と表現したうえで、これがメタ意味論への哲学者の興味の移行を動機づけるとしている。そして二人はどうやら、メタ意味論が形而上学的説明を与えるものであるという点に、自然科学と一線を画す哲学固有の余地を見出したいようである。ただ、私はこの見解には（そしてより一般に、形而上学的説明が自然科学と一線を画す哲学固有の領域に属するというタイプの見解には）一切共感していない。もっとも、二人も「もちろん、この苦境は言語哲学に限ったことではない。形而上学はますます物理学に、倫理学は道德心理学に、といった具合である」（Burgess and Sherman 2014: p. 1）と述べてはいる。

さて、意味論的事実をグラウンドする事実を明らかにする探究としてのメタ意味論というアイデアは、フッサールを解釈する上で極めて重要な観点を提供する。本稿の残りの部分では、そのことを例示するため、次の2点を示す。第2章では、『論理学研究』のフッサールの意味概念がフレーゲのそれに対してもつところのある理論上の優位を、グラウンディングの概念を用いることで明確化できることを確認する<sup>9</sup>。第3章では、グラウンディングの概念により、ダメットやエヴァンズ、ピーコックといった論者とフッサールとの比較が容易になることを確認する。

## 2 意味の神秘性の所在：フレーゲとフッサール

この第2節では、グラウンディングという観点から眺めることで、『論理学研究』におけるフッサールの意味に関するある見解——いわゆる「意味のスペチエス説」——の意義が明確になるということを確認する。この意味のスペチエス説は、「第三領域に住まう意味」というフレーゲの（悪名高い）教説と類比的なものとしてしばしば解釈されてきた。しかし、グラウンディングという観点からみれば、両者の間には雲泥の差がある。フレーゲの教説はメタ意味論をまともに遂行することを不可能にする「神話」であるのに対して、フッサールのそれは全くそうではないのである。この点を、以下で確認する。

ダメットは、フレーゲの第三領域の教説を「神話」だと非難している。彼によれば、その問題点は、言語表現の指示や思考作用の志向性を、それらがより先行的に（どういうわけか）指示や志向性をもつ存在者と（どういうわけか）関係することのおかげだ、と説明している点にある。これがどのような問題であるのかを、アナロジーを用いて明確化してみよう。

砂糖がいかにして水溶性をもつのかに関する説明として、次のような描像を提示する人がいたとする。

私たちの心的な実在とも物的な実在とも異なる第三の領域に、どういうわけか水溶性をもつ存在者がいる。この存在者はその水溶性を、砂糖の水溶性に先行する形で、しかし説明不可能な仕方でもつ。砂糖が水に触れると溶けるのは、砂糖

---

9. 第2章の議論は、葛谷 2025 の第3章および第5章に部分的に含まれる議論の要点を、グラウンディング概念を用いて整理しなおしたものであり、本質的には葛谷 2025 の第5章にすでに含まれている。

がどういふわけかその存在者と一定の関係に立っていることのおかげなのである。

もちろんこの説明は誤っている<sup>10</sup>。ただしここで注目したいのは、その誤りが「単に少し方向がずれている」といったようなものではなく、適切な探求を不可能にしてしまうような仕方で、すべてを神秘的にしてしまうという点である。まず、第三の領域の存在者は物的な実在とは隔絶した場所に存在するとされる以上、(砂糖が水に触れるような仕方では)それが水と関係することは不可能なはずだが、だとするとこれがもつとされる「水溶性」とはいったい何なのだろうか。また、第三の領域の存在者と砂糖が立つ関係——それも、後者の水溶性が前者の「水溶性」のおかげで成り立つようにさせるような関係——とは、いったいどのようなものなのだろうか。さらには、砂糖や塩などの水溶性をもつものはいったいなぜその存在者とその関係に立ち、例えば鉄や金などの水溶性をもたないものはいったいなぜその存在者とその関係に立たないのか。こういった一切がここでは説明が不可能な神秘的な事柄となっている。それゆえ、正しい説明を得るためには、まずもってこのような「神話」を放棄し全く異なる枠組みをとる必要がある。

もちろん、砂糖に関してこのような教説を支持する人は、おそらくいないだろう。多くの人にとって、上の説明は「馬鹿げている」とすら感じられるだろう。では、ある表現がその指示 (*Bedeutung*, 意味論的値を表すフレーゲの術語)をもつということに関してはどうだろうか。対応する説明は次のようなものになるはずだ。

私たちの心的な実在とも物的な実在とも異なる第三の場所に、どういふわけかソクラテスを指示する存在者が存在する。この存在者はその指示を、「Socrates」という語の指示に先行する形で、しかし説明不可能な仕方でもつ。「Socrates」という語がソクラテスを指示するのは、この語がどういふわけかこの存在者と一定の関係に立っていることのおかげなのである。

この説明には、先ほどと同様の問題点が指摘できる。が、そのことに気が付くのは、水溶性の場合ほど容易ではない。それゆえ、もしこの説明になんらかほかの点で魅力を感じたのであれば、受け入れる人がいたとしてもおかしくはない——たとえば、異

---

10. 念のため申し添えておけば、本稿において「説明」という語は、その内容の真理性を含蓄するような意味合いでは用いられていない。気になる場合には「説明仮説」と置き換えて呼んでいただいて構わない。

なる場面で使用された語がどれも全く同一の意味内容の下で理解されるという現象を、理解主体が第三の領域に住まう全く同一の存在者と（どういふわけか）関係することとして「説明」できる、といった点で魅力を感じたのであれば。

実際、上の説明の「どういふわけかソクラテスを指示する存在者」を「**Socrates**」の意義」と置き換えると、フレーゲの負った「哲学的神話の罪」としてダメットが弾劾しているものが得られる。そしてダメットは、その神話について次のように述べている<sup>11</sup>。

[独立自存の意義という] このような観点が支配的であれば、すべては神秘的である。いかにして思想が現実の他の領域にある事物に関係するのか、つまりそれらを何かについてのものにするのかを説明する方法は存在しない。私たちがいかにそれを把握するのかを説明する方法も存在しない。フレーゲが「このプロセスはひょっとしたらすべての中で最も神秘的なものかもしれない」と書いたことは全く不思議ではない。結局、私たちが語や表現に意義をいかに結びつけるのか、つまり何がそれらを語や表現の意義にするのかを説明する方法は存在しない。(Dummett 1986: pp. 252–253)

フレーゲの第三領域の神話は、砂糖の水溶性についての第三領域の神話と同じ問題を抱えている。すなわち、それを受け入れてしまうと、指示という意味論的事実がいかにして成り立っているのかを説明すること——つまり、メタ意味論——が不可能になるという問題である<sup>12</sup>。

では、フッサールの「意味 (Bedeutung/Sinn)」に関する教説はどうか<sup>13</sup>。フッサールによれば、「表現は対象を、その意味のおかげで[mittels]表示する(名指す)」(XIX/1: 54)。そして、彼は意味を、作用 (=志向性をもつ心的出来事) のスペチエスとして特徴づけていた。ところでフッサールによれば、スペチエスとは一般に、時空位置をもたず、生成消滅が意味をなさないような理念的存在者(イデアールなもの) だと言う。するとこのことは、フッサールをフレーゲと同じ「神話」にコミットさせないの

11. 本稿での引用については、特に断らない限り、原文の強調はすべて除かれている。

12. ダメットのフレーゲ批判がより具体的には意義に関するカテゴリー錯誤として解釈できるという点については、葛谷 2025 の第 5 章を参照。

13. 以下では『論理学研究』におけるフッサールの術語としての「Sinn」と「Bedeutung」を同様に「意味」と訳すが、これは『論理学研究』においてフッサール自身がこの両者を同義であるとしたことに基づく。XIX/1: p. 58 参照。

だろうか。実際、フッサール解釈の中には『論理学研究』のフッサールをそのような神話にコミットさせていると思われるものもあるし<sup>14</sup>、またダメットも最終的に『論理学研究』の意味概念を「神話」と呼んでいる<sup>15</sup>。

しかし、そのように考える必要は全くない。そしてこのことは、フッサールが表現の对象的関係をグラウンドするものとして何を考えていたかを見ることではつきりさせることができる。フッサールは表現の对象的関係はそれを理解する作用の对象的関係にグラウンドされると考えていたので、まず作用の对象的関係について確認しよう。

フッサールによれば、作用は一般に作用質料と作用性質という二つの構成要素を部分としてもつ<sup>16</sup>。作用性質が作用の種類（判断・願望・単なる表象等々）に当たる構成要素であるのに対して、作用質料は、作用が対象に関係する仕方の違いを完全に決定する特性をもつ作用の構成要素である。

したがって質料とは、对象的なものへの関係を作用に初めて与えるものであり、しかも、作用が思念する对象的なもの一般だけでなく、その作用がそれを思念するその仕方もまたきっちり定まるほどに、その関係を完全に定まった形で与えるものである、と考えられなければならない。（XIX/1: p. 429）

ここで重要なのは、フッサールにおいて、作用がどのような仕方でその対象をもつのかを決定するのは、第三の領域に住まう存在者ではなく、作用質料と呼ばれる作用の構成要素だという点である。それゆえフッサールにおいて、作用の对象的関係の仕方を決定する要素は、作用ごとに数的に異なる。しかしだとすると、二つの作用が（同じ対象に）同じ仕方で関係するということはどのように理解されるのか。

---

14. 例えば、作用の指示を作用のスペチエスである意味と対象のスペチエスの間の「IK 関係」に仲だちさせる Chrudzinski 2002 など。

15. Dummett 1993a: p. 25 参照。ただし、ダメットは「神話」論文ではそのように述べることを明示的に差し控えていた。Dummett 1986: p. 250 参照。

16. なお、フッサールの部分全体論において、（個別者としての）作用はその部分となる作用質料に弱く基づけられている（基づけ関係の強弱の区別については Fine 1995 参照）。Correia 2004 がこの弱い（かつ個別者間の）基づけ関係を「グラウンディング」と呼ぶ関係と同一視することで（フッサールとは独立に）説明しようとしていることは現在の文脈では興味深い。しかし、その「グラウンディング」関係はあくまで「一方が存在するおかげで他方が存在する」という個別者間（契機含む）の存在に関する依存関係であり、ここで問題にしているグラウンディング関係とは異なる。

フッサールの答えは、それは二つの質料の質的同一性として理解されなければならない、というものである<sup>17</sup>。そして、このような質的同一性の理解可能性から一般的に要請されるものとして導入されるのが、フッサールの「スペチエス」の概念である。例えば複数の赤い紙片は、それぞれ数的に異なるにもかかわらず、どれもその色の点では同じである。フッサールはここから、複数の紙片を一括りにする一つの観点として普遍者が要請されると考え、それを「スペチエス」と呼んだ<sup>18</sup>。この普遍者は観点としてみれば時間位置をもたず生成消滅が問題とならないので、「イデアール」と言われる。それゆえ、「砂糖とクエン酸は同種の構造をもち、その同種の構造のおかげで（つまり、同じ仕方で）水に溶ける」という主張は、フッサールの言えは「砂糖とクエン酸は、その構造がどちらもイデアールな単一体としての（極性分子）スペチエスに属し、そののおかげでどちらも水に溶ける」ということになる。そして同様に、「二つの作用は同種の質料をもち、その同種の構造のおかげで（つまり、同じ仕方で）対象についてのものである」は、フッサールの言えは「二つの作用は、その質料がどちらもイデアールな単一体として同一のあるスペチエスに属し、そののおかげでどちらも対象についてのものである」ということになる。

したがって、フッサールの説明には、フレーゲ的な神話的存在者は登場しない。二つの作用が同じ仕方で対象的關係をもつことについてのフッサールの説明には、第三領域に住まう不可解な指示的存在者は登場しない。それはちょうど、「砂糖とクエン酸は（極性分子という）同種の構造をもち、その構造のおかげで水に溶ける」という説明に第三領域に住まう不可解な水溶的存在者が登場しないのと同様である。

では、表現の对象的關係の説明に関してはどうか。フッサールによれば、ある表現は、それを理解する作用（意味作用/意味志向作用/意味付与作用）がある対象と一定の仕方で対象的關係に立つことにより、その対象と対象的關係に立つ<sup>19</sup>。つまり一般に、表現が一定の仕方で対象的關係は、それを理解する作用が一定の仕方で対象的關係をもつことにグラウンドされ、この後者はその作用の作用質料が対応する種類のものであることにグラウンドされる。よって、表現が一定の仕方で対象的關係

---

17. 三段落後の内容を踏まえたうえで、そこで引用している XIX/1: pp. 105–106 を参照。

18. XIX/1: pp. 105–106, 117–118 参照。

19. 「私たちが直観を欠いた意味志向と充実化された意味志向の間の根本的な区別を基礎に取るならば、語音として表現が現出することが遂行される感性的な作用とは別に、二重の作用ないし作用系列が区別されうる。その一方は表現にとって本質的であり、表現が一般に表現である限り、つまり意味生化された語音である限りで、存在していなければならない作用である。この作用を私たちは意味付与作用ないし意味志向と呼ぶ」（XIX/1: pp. 43–44）。

係は、意味作用の作用質料が対応する種類のものであることによってグラウンドされる<sup>20</sup>。そしてこの意味作用が対象的關係をもつ「仕方」、つまり作用質料が属するある特定の種類が、表現の意味だとされる<sup>21</sup>。

よって、二つの表現が同じ意味をもつことについてのフッサールの説明には、二つの作用が同じ仕方で対象的關係をもつことについてのフッサールの説明とまったく同様に、第三領域に住まう不可解な指示的存在者は登場しない。これがフレーゲの第三領域の神話に対してフッサールの意味のスペチエス説が明確に優越している点であり、以下の箇所はこのような文脈で理解される必要がある。

さて、ここで私たちが主張するこの [=意味の] 真の同一性は、スペチエスの同一性に他ならない。それゆえ、しかもまさにそうであるからこそ、この同一性はイデアールな単一体として、個々の個別者のばらばらな多様性を包括しうる（一つにまとめる）のである。イデアールで単一的な意味に対する多様な個別者にあたるものとは、もちろん、意味する作用のもつ対応する契機、つまり意味志向である。したがって、意味がそのつどの意味する作用に対して立つ関係は […]、たとえばスペチエスにおける赤が、ここにある、どれも同じこの赤色を「もつ」細長い紙片に対して立つ関係と同じである。(XIX/1: pp. 105–106)

ところで、以上のフッサールの考え方は、エヴァンズによるフレーゲの「呈示の様態」および「意義」の概念の脱神秘化の方針と明確な類似性をもつ。エヴァンズはフレーゲの意義概念を（改訂的に）解釈する方針を以下のように提案する。

私が提案するのは、望ましい[フレーゲの意義概念の解釈のために必要とされる「対象について考える仕方」の]観念は、ある主体の思考が問題の対象について

---

20. Schaffer (2012)によればグラウンディングが推移的であるという主張には反例があるが、ここでは問題とならないと思われる。Richardson 2020 の区別と特徴づけが適切なら、**how-grounding** は推移的になる。なお、本稿のもととなった講演の質疑応答の際、富山豊氏より「作用質料によるグラウンディングは意味論的事実についての形而上学的説明ということになるのか」という質問があった。その際に回答したとおり、答えは「Yes」である。なぜなら、メタ意味論的説明は形而上学的説明だからである。

21. 「表現は、表現が意味するということによってのみ、対象的關係を得るのであり、したがって次のように言われるのも当然である。表現は対象を、その意味のおかげで [mittels] 表示する（名指す）のであり、言い換えれば意味作用とは、その都度の対象を思念する一定の仕方である」(XIX/1: p. 54)。

の思考であるということを作り立たせるものに関する説明という考えの観点から説明されるということだ。そのような説明が次のように書き出されたら想像してほしい。「 $S$  が  $a$  について考えているということは、...  $S$ ... という事実のおかげ [in virtue of] である」.[...] 私は次のように提案する。他の主体  $S'$  が対象  $a$  について同じ仕方と考えているのは、 $S$  に関して与えられた説明の  $S$  への言及を  $S'$  への言及へと置き換えることで導かれる「 $S'$  が  $a$  について考えているということは、...  $S'$ ... という事実のおかげである」が真なる言明であるちょうどその時である。(Evans 1982: p. 20. 強調は引用者による)

同一の対象に対して二人が同じ仕方と考えているとは、それらの思考がその対象についてのものであるという事実の成立を説明するもの(つまり、それらをグラウンドするもの)が同じということだと理解しよう、というのがここでのエヴァンズの提案だ。ところで、その記述に登場する個々の主体の概念能力をエヴァンズはアイデア(Idea、頭文字を大文字にすることで術語化されている)と呼んだが、これは個々の主体において数的に異なる<sup>22</sup>。その意味で、数的に同一の事実によって二人の思考の対象的關係が説明されるということとはあり得ない。しかし、数的に異なるアイデアは対象的關係をグラウンドするという観点において質的に同一でありうる。このように個別化されるものこそがフレッゲの「呈示の様態」であり、「意義」である<sup>23</sup>。エヴァンズはこのような(改訂的な)解釈を通じて、これらの概念を脱神秘化しようとした。しかしこれはまさに、フッサールのスペチエス説の方針そのものなのである。

もちろん、フッサールの意味のスペチエス説それ自体は、具体的なメタ意味論的説明とは到底言い難い。確かにそれは、ある作用の志向性の説明項を「その作用の何らかの内的構成要素」として記述する。しかしこれは、「砂糖の水溶性は、砂糖のもつ何らかの構造のおかげだ」と言うことが具体的な説明とは言い難いと同様に、具体的内実を欠いている<sup>24</sup>。より実質のある具体的な見解(意味の検証手続き的解釈)を『論理学研究』のフッサールから取り出すことは、本稿の目的を外れる<sup>25</sup>。むしろこ

22. Evans 1982: p. 104n24 参照。

23. これについても Evans 1982: p. 104n24 で述べられている。

24. ただし、これはトリビアルなわけではない。砂糖がその構造とかかわりのない理由で水に溶けている可能性が、これにより排除されるからである。

25. この種の解釈については、富山 2023 の第 4 章、葛谷 2025 の第 4 章(とりわけ第 3 節)を参照。ただ注意すべきなのは、(私のものも含め)これらの解釈が自然と示唆するようなある種の基底のメカニズム(例えば、読んだ文を構文解析し、対応する手続きを呼び出すようなメカニズム)に関する主張は、『論理学研究』には見出されえないということである。その理

こでのポイントは、検証手続き的な解釈を持ち出さなくとも、フッサールがエヴァンズの戦略でフレーゲの神話を脱却していたことが、グラウンディング概念を用いた整理から分かる、ということである。意味のスペチエス説のポイントは、メタ意味論の可能性を適切に用意するという点にあり、これがフレーゲの第三領域の神話との大きな違いである。

### 3 越えられない壁の所在：エヴァンズ・ダメット・フッサール

さて、先ほどエヴァンズとフッサールとの親近性を指摘した。実際、すでに指摘されているように、エヴァンズないし彼のアイデアの概念を発展させた心的ファイル理論とフッサールの見解の間には興味深い共通点がある<sup>26</sup>。しかし、彼らとフッサールはある決定的な点において、決して相容れない。そしてこれは、現在の分析哲学のメインストリームがフッサール現象学と袂を分かち地点であり、またフッサールがダメットと道を共にする地点でもある。この点もまた、グラウンディングに注目することではっきりさせることができる。

#### 3.1 形而上学ファースト：ピーコック、エヴァンズ、心的ファイル理論

エヴァンズや心的ファイル理論の重要な特徴の一つは、ピーコックが「形而上学ファースト」と呼んだ次のような見解に基づく点だろう。

形而上学ファーストの諸事例においては、その領域の形而上学が、その領域に関する文の意味の本性に関する哲学的説明の順序において、またその領域に関する志向的内容の本性の説明において、先行する位置を占める。私には、多くの領域において、この形而上学ファーストの見解が正しいように思われる。形而上学ファーストの具体例として、空間や時間の領域、そしてそれらに関する知覚的内

---

由はもちろん、そのようなメカニズム等々の担い手としての主体・自我は『論理学研究』においては明示的に排除されているからである。そもそも『論理学研究』における自我とは、「諸体験の具体的複合体」でしかない (XIX/1: p. 391)。なお、よく知られているように、フッサールは『論理学研究』でのこの自我理解を後に改定する (XIX/1: p. 374 の第 2 版注、XIX/1: p. 376 の第 2 版追記)。とはいえもちろん、それによって上のようなメカニズムが現象学の射程に入ってくるわけでもない (XIX/1: p. 368 の第 2 版注)。

26. この点については、Beyer 2008, Beyer 2013, 成瀬 2015 参照。

容の領域だけでなく、意識的心的状態の広範な領域、さらにはそれらについての心的内容や言語の領域も含まれると論じることができる。(Peacocke 2019: p. 7)

これは例えば、物質的事物についての語りや思考の説明は、それとは独立に遂行できる「物質的事物とは何か」とか「自然的世界とは何か」に関する形而上学に訴えてなされるということである。しかし、なぜこう考えるのだろうか。

エヴァンズや心的ファイル理論においては、その理由は明確である。それは、彼らの理論が、自然的な事実としての「情報（の流れ）」の概念を基礎に置いており、私たちの語りや思考は、その情報の流れをうまく利用する能力の発動として理解されているからである<sup>27</sup>。それゆえ、一定の適切な情報理論（を含む形而上学）の所有が、私たちの語りや思考を適切に理解するための不可欠の前提となる。

この点をわかりやすくする簡単なアナロジーとして、洋上を進む帆船を考えよう。洋上において帆船は、風上を含めいろいろな方向に進むことができる。では、このような帆船の機動能力はいかにして成立しているのだろうか。この問いに対する答えを、帆船の構造（例えば、帆がどのような形状をしており、どのような材質からできているか等々）だけに言及することで与えようとする人はいないだろう。もちろん、帆船の構造は、必要とされる答えの不可欠の一部をなす。しかし、その構造がいかに帆船の機動能力に寄与しているのかを理解するためには、風や水と（帆船に限らず一般に）物体との間に成り立つような、一定の自然的事実に関する一般的知識が必須の前提となる。なぜなら、帆船は風や水の力を利用して推進力を得ているからである。例えば、「風とはどのようなもので、物体とどのように相互作用するのか」についての何らかの流体力学的知識があつて初めて、帆船の機動に対して帆がどのように寄与しているのかを理解することが可能になる。問題の知識が日常的なもので十分か、それとも専門的なものが必要となるかは、その問いが発せられた実践的な文脈に依存するだろうが、いずれにせよ風や水の力と帆船の推進力の間の関係をなんらか説明することができる程度の力学的知識が必須となる。風や水、物体、およびそれらの相互作用に関する最低限の知識があつて初めて、風や水の力を利用する物体としての帆船の機動が理解できる。

---

27. 関連する「情報」の概念を定式化する方法としては様々なものが提案されてきた（自然的情報のバリエーションについては、榎本 2022 参照）。しかし、それらの多くに共通する核は、それが何らかの統計的・法則的な相関関係のことを指すということである（Burge 2010: p. 17 参照）。いずれにせよ、情報の流れは私たちの存在とは関係なく世界の側に実在するという点が、ここでのポイントである。

エヴァンズや心的ファイル理論をはじめとする、情報理論に基づくタイプの志向性理論の観点から言えば、同じことが私たちの語りや思考に関して成り立つ<sup>28</sup>。私たち人間は、世界内の物事について語ったり考えたりできる。現在そのような能力は、その身の回り（見たり触ったりできる範囲）をはるか超えて、地球の裏側や銀河の向こうにも到達している。このようなことはいかにして成立しているのだろうか。この問いに対する答えは、認知主体である私たち自身を（内側からであれ、外側からであれ）いくら眺めても、それだけでは絶対に与えられ得ない。もちろん、私たちのもつ何らかの構造は、必要とされる答えの不可欠の一部をなす。しかし、私たちの構造がいかに私たちの思考能力に寄与しているのかを理解するには、私たちから独立に自然的世界の中で成り立つ自然的事実としての情報の流れに関する一般的知識が必須の前提となる。なぜなら、私たち人間は（ほかの生物と同様）情報の流れを利用して世界の在り方を把握しているからである。「情報とはどのような存在者であり、自然的世界の中でどのような仕方で流れるものなのか」についての何らかの情報理論的知識があって初めて、私たちの語りや思考に対して私たちの構造がどのように寄与しているのかを理解することが可能になる。問題の知識が日常的なもので十分か、それとも専門的なものが必要となるかは、その問いが発せられた実践的な文脈に依存するだろうが、いずれにせよ情報の流れと語りや思考の間の関係をなんらか説明することができる程度の情報理論的知識が必須となる。その種の最低限の知識があって初めて、情報の流れの中でそれを利用するものとしての人間の語りや思考が理解できる。

さて、ここで必要とされる種類の情報理論は、標準的には、例えば情報の流れに関する語りを物理的な事態の間の法則論的・統計的相関の観点から規格化することを含む<sup>29</sup>。これは、関連する様々な事柄、つまり物理的な事物や事態とは何か、自然法則とは何か、因果とは何か、統計的相関とは何かということに関する理解を（それに必要な程度まで）深めることを要求する。現在、こういった営みは「形而上学」と呼ばれる<sup>30</sup>。

---

28. 心的ファイル理論をベースとした固有名による情報ネットワークに関する具体的な説明は藤川 2014 の第 2 章にある。

29. 例えばドレツキの条件付確率を用いた情報概念や、ミリカンの「局所的反復記号」としての情報概念などはその一例である。Dretske 1981, Millikan 2004 参照。

30. このような意味での「形而上学」は（例えば初期カルナップの用法とは異なり）、「経験を越えている」とか「科学を越えている」といった意味合いを直ちにもつものではなく、形而上学と自然科学の間の連続性が争点としてもちあがる。方法論的観点に限定してみても、一方の極には、例えば高取 2023 が表明するような「分析形而上学は経験科学とは探究の

ここでのポイントは、そのような形而上学は、私たちの思考や意味についての考察（意味論およびメタ意味論）から独立に探究可能だと考えられていることである。またそれは、合理的な思考者である限りですでに知っている・知りうるようなものだとも考えられていない<sup>31</sup>。このような態度は、形而上学を哲学の「中心」と見なすティモシー・ウィリアムソンの以下のような文言に明確に表明されている。

現代の形而上学の多くは、そもそも思考や言語を主要な関心事とはしていない。その目的は、根本的な種類の存在者がどのようなものか、またそれらがどのような性質や関係をもつかを明らかにすることであり、それらについての我々の思考の構造を研究することではない——もしかすると、私たちは形而上学者によって探究が始められるまで、それらについて何の思考ももたないかもしれない。現代の形而上学は、実体や本質、普遍者や個別者、空間と時間、可能性と必然性を研究する。（Williamson 2007: pp. 18–19）

現在の分析哲学において、多くの哲学者が、意味や思考の問題と独立のものとして形而上学に取り組むことができると考えている<sup>32</sup>。これに加えて、意味や思考を説明するには説明の順序からしてそうであるべきだというのが、形而上学ファーストの考えである。

### 3.2 意味ファースト：ダメットとフッサール

さて、このような考えはまさにダメットの見解と明確な対照をなす。少し長いですが、『形而上学の論理学的基礎』から引用しよう。

依然として成り立つのは、語がそれが意味するところのものを意味するのは、私たちがそれらをどう使うか、ただそれのみのおかげである [only because of the use

---

対象も方法も大幅に異なっており、科学から隔離した研究領域である」という立場があり、他方の極には飯田 1989/2023 が（改訂版の後記で）「強い方法論的自然主義」と呼ぶ（だけでなくコミットもしている）立場がある。

31. これを、不可知の実在によって認識が支えられているという見解と混同してはならない。その基盤の探究を原理的に妨げるものは何もない。ただ、その基盤は、合理的思考者である限りにおいて知りうるようなものであるという保証は一切ないというだけである。

32. このような考えの震源地（のうち最大のもの）はもちろん、Kripke 1972 だろう。Morris 1997 はこの点に関する見やすい哲学史的整理を与えている。

to which we put them]、ということだ。語がどう機能するのかについて、完全な理解を得る（明確に把握する）ためには、まずは自分たちの言語実践を注意深く精査し、それが実際にどのようなものを意識する必要がある——ただしその最終目標は、その実践を体系的に記述することであるが。そのような記述は、私たちの語や表現が特定の意味をもつとはどういうことかの表示 [representation] をもたらずだろう。それは、私たちが言語を学ぶ際に習得するすべてを含みこむ必要があり、それゆえ言語話者にしか把握できない概念を所与としてはならない。このようにして、その記述はあるものを言語たらしめるものは何か、そして語や文が意味をもつとはいかなることかを明らかにする。／言語が機能する仕方（つまり、子供が言語習得の過程で学ぶすべてのこと）についてのそのような記述、これが意味理論 [meaning-theory] を構成するのである。（Dummett 1991: p 13. 強調引用者）

ダメットによれば、語が何かを意味するのは、私たちがそれをどう使用するかによって完全に決定される（意味の使用説）。つまり、意味論的事実は話者の使用法に全面的にグラウンドされている——ただし、ここでの使用法とは、話者の実際の振る舞いに見られる規則性 (regularity) ではなく、（ちょうどボードゲームのルールがそうであるように）私たちの合理的なふるまいを導く規則 (rule) だと考えるべきである<sup>33</sup>。また、そのような使用法は、言語を学習する過程で私たちが学んだことであり、言語実践を反省的に観察し明確な意識にもたらすことで、体系的に記述することができるし、またその記述の正しさも判定できる——というのも、ある実践を支配する（規則性の記述ではなく）規則の記述が正しいかどうかは、その実践に参加するものが反省を通じてのみ決定できるからである<sup>34</sup>。それゆえダメットは、続けて次のように言う。

33. Dummett 1991: pp. 88–89 参照。

34. 「単に、観察された言語的行動と一致しているという理由だけで、それ [意味理論] が正しいと判断されることはない。むしろ、その理論が正しいかどうかの唯一の決定的な基準は、その言語の話者が、反省に基づいて、その理論が正しいと認める用意があること、つまり、彼らが実際に導かれている原理の具体化になっていると認める用意があることである。このような理論は、観察だけでは到達できず、反省を必要とする。そして、まさに反省によって、その理論が成功するか失敗するかを決定しなければならない」（Dummett 1978: pp. 104–105）。おそらく『形而上学の論理学的基礎』の時点のダメットはここまで反省一本鎗で行けると思っていたわけではないだろうが、同書第4章を見ても分かるように、反省や意識が重要な要素だと考えている点は変わってはいない。

意味理論を構築する作業は、原理的には形而上学的な前提（ないし背景的考え）を伴わずに取り組むことができる。この理論の成功は、実際に観察される実践と一致する有効な説明を提供するかどうかによって評価されるべきである。

(Dummett 1991: pp. 13–14)

意味理論を構築するには、言語話者たちが自分たちの言語使用を反省・観察し、そこで私たちの言語使用を導いている使用法がいかなるものかを体系的に記述すればいいし、そうすべきなのであって、物質的事物とは何かとか、そもそも事物が私たちと独立に実在するかどうかといったことに関して先に何か態度を決定する必要はない。この意味で、ダメットの言う意味理論（意味論的事実をグラウンドするものは話者の言語使用だと考えるメタ意味論）は形而上学に先行する。

さらに、ダメットによれば意味理論は実在論と反実在論の間の形而上学的対立を、さらには形而上学的諸論争それ自体を解決する。

このようにして、意味理論は実在論に関する形而上学的論争を解決する手段を提供する。それは間接的な手段ではなく、これらの論争の本質に即したものである、すなわち、さまざまな種類の文にどのような意味を付与すべきかに関する論争として理解されるべきものである。[...] それはまた、形而上学的な諸論争そのものを決着させるのだろうか？ 私の主張は、そうなるというものである。

(Dummett 1991: p. 14)

つまりダメットにおいて、意味理論は形而上学に先行するだけでなく、さらに形而上学を解決する。ピーコックに倣って、このような見解を「意味ファースト」と呼び、先ほどの「形而上学ファースト」と対置しよう<sup>35</sup>。

さて、依拠すべき地盤については（少なくとも一見したところは）ダメットと意見を異にするにせよ、フッサールが上記の対立においてダメット側に立つことは明らかだろう。確かに、『論理学研究』におけるいわゆる「形而上学的中立性」は、超越

---

35. ピーコックによれば、同様の見解はブランダムにも見出される。なお、ピーコック自身は「形而上学ファースト」を領域相対的に（かつ、領域を分類する語として）用いているが、「意味ファースト」はそうではない。ピーコックの「意味ファースト」は、本稿の注 38 で触れられる「全域的な強い意味ファースト」に相当する見解を指す。また、領域相対的に見た場合には、優先なし事例 (no-priority cases) もある。Peacocke 2019: pp. 7–8 参照。

論的現象学への転回によって（何らかの意味で）放棄された<sup>36</sup>。しかし、これはもちろん、彼が形而上学ファーストに舵を切ったということの意味するはずはない。形而上学ファーストと両立するような「現象学的還元」や「エポケー」の解釈が一体どのようなものになるのか、想像すらつかないだろう。むしろこれは、ザハヴィの指摘するように、自身の現象学が、実際にはある種の形而上学的問題を解決できるし、また解決すべきだということへの自覚だと理解すべきだと思われる<sup>37</sup>。つまり、超越論的現象学への転回とは、意味の説明が形而上学に先行するだけでなく解決もするという見解——意味ファースト——へ明示的に与することを意味する。この点で、ダメットとフッサールは完全に軌を一にする。本稿がここで強調したいポイントは、グラウンディングの概念を用いてメタ意味論とフッサールを接続することで、ダメットとフッサールとの間の検証主義的な意味理解の類似性に訴えることなしに、このことを確認することができる、ということである。

以上、グラウンディング概念を用いることにより、フッサールがフレーゲ、エヴァンズ、ピーコック、そしてダメットとどのような関係に立つのかを整理する一つの有用な観点が得られるということが確認できたと期待する。

#### 補足：意味理論独立と形而上学独立、意味ファーストと形而上学ファースト

本稿のもととなったシンポジウムでの質疑応答の際、富山豊氏より「フッサールは意味についての言明に関してだけは「形而上学ファースト」の立場だということになるのか？」という質問があった。その際の私の回答は関連する用語の理解に資する部分が大きいと思われるため、ここでもう一度それを繰り返しておきたい。

まずは上記の質問の内容を確定させるのに必要と思われる区別を導入することを試みる。X をある対象領域（例えば物理的事物や数的対象など）だとする。そして、X についての形而上学を「X の形而上学」、X について語る言語（や X についての思考システム）の意味理論を（ちょっと誤解を招きやすい言い方になるが）「X の意味理論」と呼ぶことにしよう。この時、以下のすべては別のものとして区別される必要がある。

❖ X に関する形而上学独立：X の形而上学は、X の意味理論なしに可能

---

36. 『論理学研究』における形而上学的中立性の位置づけについては植村 2017 の 4.3 節、第 8 章および結論が詳しい。

37. Zahavi 2002 参照。

- ❖ Xに関する形而上学ファースト：Xの意味理論は、Xの意味理論なしに可能なXの形而上学なしには不可能
- ❖ Xに関する意味理論独立：Xの意味理論は、Xの形而上学なしに可能
- ❖ Xに関する弱い意味ファースト：Xの形而上学なしに可能なXの意味理論が、Xの形而上学の問題を解決できる
- ❖ Xに関する強い意味ファースト：Xの形而上学なしに可能なXの意味理論が、かつそのみが、Xの形而上学の問題を解決できる

一般に、Xに関する弱い意味ファーストはXに関する意味理論独立を含意し、両者はXに関する形而上学独立と両立可能だが、Xに関する形而上学ファーストとXに関する意味理論独立、Xに関する強い意味ファーストとXに関する形而上学独立は両立不可能である<sup>38</sup>。

さて、これを踏まえて富山氏の質問を振り返ると、それはおそらく「フッサールは意味以外のものについては（強い）意味ファーストの立場を採っているのに、意味に関してだけは形而上学ファーストの立場を採っているのか？」という質問だと思われる。つまり、フッサールは、意味以外の存在者（例えば物理的事物）についてはそれについての語りや思考の理論を通じてのみその本性の探求が可能だと考えているのに、意味についてだけは意味についての語りや思考の理論を経由せず、意味の本性を直接に探求可能だと考えているのか、ということである。

おそらく『論理学研究』のフッサールは、意味に関して形而上学独立を採用していると思われる。というのも、『論理学研究』においてフッサールは、意味の意味理論を介することなく直接に意味について探求していると思われるからである。同じ理由から、『論理学研究』のフッサールは、意味に関する強い意味ファーストは採用していないと思われる。しかし、意味に関する形而上学ファーストや弱い意味ファーストにコミットしているかどうかについては、『論理学研究』のテキストだけでは確かなことは言えなさそうである（おそらくどちらにもコミットしていないとは予想されるが）。また、『論理学研究』以降に関しては当然ながら別途調査が必要である。たとえば、『イデー I』で展開されるような対象の存在論的身分をその所与性様式の観点から分析するという手法は、意味ファースト的だと言えそうである。よって、

---

38. また、これらのいずれかについて、Xが何であれ成り立つと主張をする場合には、それを「全域的 (global)」と形容できるだろう。例えば、Xが何であれ、Xの形而上学なしに可能なXの意味理論が、かつそのみが、Xの形而上学の問題を解決できるとする見解は、全域的な強い意味ファーストだということになる。

意味的なものを所与性様式の観点から分析することは、意味的なものに関する（少なくとも弱い）意味ファーストをフッサールが採用していることを示しているかもしれない。しかし、意味的なものに関する弱い意味ファーストはせいぜい意味的なものに関する意味理論独立を含意するのみで、それ以外のどのオプションとも両立する。この種のアプローチがどれほど徹底されているのか、それ以外のアプローチがどれほど許容されているのか等を含め、ここには検討の余地が多分にある。

## 参考文献

- Beyer, C. 2008. “Noematic Sinn.” In Mattens, F. ed. *Meaning and Language: Phenomenological Perspectives*. Springer Netherlands.
- . 2013. “Noema and Reference.” In Frauchiger, M. ed. *Reference, Rationality, and Phenomenology: Themes from Føllesdal*. De Gruyter.
- Burge, T. 2010. *Origins of Objectivity*. Oxford University Press.
- Burgess, A. and B. Sherman. 2014. “A Plea for the Metaphysics of Meaning.” In Burgess, A. and B. Sherman (eds) *Metasemantics: New Essays on the Foundations of Meaning*. Oxford University Press.
- Centrone, S. 2010. *Logic and Philosophy of Mathematics in the Early Husserl*. Springer.
- Chrudzimski, A. 2002. “Von Brentano zu Ingarden: Die Phänomenologische Bedeutungslehre.” *Husserl Studies* 18: 185–208（邦訳：アルカディウス・フルヅィムスキ「現象学的な意味の理論：布伦ターノからインガルデンまで」，植村玄輝訳，『現代思想 2009年 12月臨時増刊号 総特集＝フッサール』，2009年. pp. 66–88）.
- Correia, F. 2004. “Husserl on Foundation.” *Dialectica* 58(3): 349–367.
- Dretske, F. 1981. *Knowledge and the Flow of Information*. MIT Press.
- Dummett, M. 1978. “What Do I Know When I Know a Language?” Reprinted in Dummett (1993b). 94–105.
- . 1986. “Frege’s Myth of the Third Realm.” Reprinted in Dummett (1991a).
- . 1991a. *Frege and Other Philosophers*. Clarendon Press.
- . 1991b. *The Logical Basis of Metaphysics*. Harvard University Press.
- . 1993a. *Origins of Analytical Philosophy*. Harvard University Press（邦訳：マイケル・ダメット『分析哲学の起源』，野本和幸ほか訳，勁草書房，1998年）.
- . 1993b. *The Seas of Language*. Oxford University Press.
- Evans, G. 1982. *The Varieties of Reference*. Oxford University Press.
- Fine, K. 1995. “Part-whole.” In Smith, B. and D. Woodruff Smith (eds) *The Cambridge*

- Companion to Husserl*, p. 463–486, Cambridge University Press.
- . 2012. “Guide to Ground.” In Correia, F. and B. Schnieder (eds) *Metaphysical Grounding: Understanding the Structure of Reality*. Cambridge University Press.
- Kaplan, D. 1989. “Afterthoughts.” In Almog, J., J. Perry, and H. Wettstein (eds) *Themes From Kaplan*. Oxford University Press.
- Kripke, S. 1972. *Naming and Necessity*. Harvard University Press.
- Millikan, R. G. (2004). *Varieties of Meaning: The 2002 Jean Nicod Lectures*. MIT Press.
- Morris, M. 2017. “Metaphysics, Philosophy, and the Philosophy of Language.” In Hale, B., C. Wright, and A. Miller (eds) *A Companion to the Philosophy of Language*, 2<sup>nd</sup> edition. Wiley-Blackwell.
- Peacocke, C. 1992. *A Study of Concepts*, The MIT Press.
- . 2019. *The Primacy of Metaphysics*. Oxford University Press.
- Richardson, K. 2020. “Grounding Pluralism: Why and How.” *Erkenntnis* 85(6): 1399–1415.
- Schaffer, J. 2012. “Grounding, Transitivity, and Contrastivity.” In Correia, F. and B. Schnieder (eds) *Metaphysical grounding: understanding the structure of reality*. Cambridge University Press.
- Stalnaker, R. 1997. “Reference and Necessity.” In Hale, B. and C. Wright (eds) *A Companion to the Philosophy of Language*. Wiley-Blackwell.
- Williamson, T. 2007. *The Philosophy of Philosophy*. Wiley-Blackwell.
- Zahavi, D. (2002). “Metaphysical Neutrality in Logical Investigations.” In Zahavi, D., F. Stjernfelt (eds) *One Hundred Years of Phenomenology*. Springer.
- 飯田隆. 1989/2023. 『[増補改訂版] 言語哲学大全 II : 意味と様相 (上)』. 勁草書房.
- 植村玄輝. 2017. 『真理・存在・意識 : フッサール『論理学研究』を読む』. 知泉書館.
- 榎本啄杜. 2022. 「自然的情報は間違い可能性をもたないのか? : 2 つのアプローチから見る多元性」. 『哲学』 40: 22–47.
- 葛谷潤. 2025. 『志向性の基礎』. 晃洋書房.
- 高取正大. 2023. 「分析形而上学と経験科学の連続主義に対する批判的検討」. 『科学哲学』 56(1): 59–82.
- 富山豊. 2008. 「初期フッサールにおける事態論」. 『論集』 27: 252–265.
- . 2023. 『フッサール 志向性の哲学』. 青土社.
- 成瀬翔. 2015. 「ノエマと心的ファイル」, 『フッサール研究』 12: 1–15.
- 藤川直也. 2014. 『名前に何の意味があるのか : 固有名哲学』. 勁草書房.